

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 10 月 19 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370749

研究課題名(和文)音楽移転論による明治期の洋楽受容の研究

研究課題名(英文)Reception of Western Music in Meiji Japan: A Music Transfer Approach

研究代表者

竹中 亨 (Takenaka, Toru)

大阪大学・文学研究科・教授

研究者番号：90163427

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：近代日本における洋楽の受容は、音楽移転がきわめて迅速に進行したケースであった。本研究は、それがなぜ可能であったかを明らかにすることを目的としている。

研究の結果、洋楽を手段視することで、異質な音楽文化に付随する違和感が中和された、洋楽が、「維新の敗者」に心理的・物質的な補償を与えた、洋楽は、世紀転換期には、青年層の社会的抗議のイデオロギー的表現となった。

研究成果の概要(英文)：This research project aims to examine how and why reception of Western music went ahead swiftly and sweepingly in Meiji Japan though Western music was extremely strange to the native music culture. This can be seen as rare case of music transfer.

The research shows 1. the incongruousness immanent to Western music was neutralized by degrading it as tool; 2. Western music provided the "losers of Restoration" with alternatives to compensate their deprivations in a psychological and material way; 3. Western music served as ideological means for the "rebellious" youth to express their discontent with status quo of Meiji society.

研究分野：西洋史学

キーワード：明治日本 西洋音楽 ワーグナー 伊沢修二 幸田延 デイトリヒ 島崎赤太郎

### 1. 研究開始当初の背景

報告者は従来、近代における日独間の関係史を研究してきたが、その課程で、日独関係の一環として両国間における文化の移転に関心が強まった。

近代日本はドイツから種々の制度・技術を導入したことはよく知られている。ただ、従来は単なる交流史という観点から、これらを単なる移植として捉えることに終始していた。そうではなく、これらの制度・技術が近代日本に根づく際にいかなる変容を蒙り、また日本社会にどのような影響を与えたか、という分析がより意義が大きいと考えられるようになった。

研究対象としては音楽をとりあげた。ドイツは一般に芸術音楽の中心国と見なされている。さらに、日本のクラシック音楽におけるドイツの役割に顕著にみるごとく、音楽は、日独間の文化交流で大きな役割を果たした。これらが、音楽を対象とした主たる理由である。

以上のような事情から、音楽を題材にして、文化移転について有意味な研究が可能だと想定するにいたった。

研究においては、対象時期を文化移転の始動期にあたる明治時代にしぼることにした。文化移転の様態がより明快な形で浮彫にできると想定されたからである。

### 2. 研究の目的

目的としては第一に、音楽文化がドイツから日本にいかに移転したかの歴史的事実を明らかにすることであった。第二に、音楽など文化移転がおよそどのようなメカニズムで進行するかを解明することであった。

第一の目的を敷衍して言えば、従来の音楽史研究では、西洋音楽が到来した幕末・維新时期については詳細な研究がある一方、受容が本格化した明治中期以降については研究が手薄であった。

一例を挙げるなら、洋楽受容に決定的な役割を果たした「お雇い」外国人教師についても、この時期のものはその事績が十分明らかにされていない。ドイツ音楽の受容のうえで欠かすことのできないオーストリア人音楽家のディトリヒ Rudolf Dittrich はその好例である。

また音楽留学生についても同様である。幸田延をはじめ、10 数人に上る文部省ルートの留学生が欧米でどんな勉強・生活を送り、また帰国してからどんな役割を果たしたかも、従来十分に解明されてこなかった。

したがって、まず基礎的事実を明らかにし、確定していくという作業が必要であり、これが本研究でも第一の目的となった。

次に、第二の目的について述べる。これはすなわち、移転の事実に基づく経過を明らかにしたうえで、次に重要なのは、いかなる要因によって移転が進行したかを考察することである。

この関連で重要なのは、近代日本は全世界的に見ても、西洋芸術音楽の受容では際だった例外的事例だという点である。トルコやタイなど、他の非西洋地域でも 19 世紀には西洋音楽の受容がはかられるが、しかし日本ほど、洋楽の移転が迅速かつ深く進行した事例はない。その結果、今日のわれわれが見るように、日本の音楽シーンは、クラシックからポピュラーにいたるまで、基本的に西洋音楽を下敷きにするようになったのである。

こうした圧倒的な音楽移転がいかに可能であったのかという問題を、近代日本での音楽の文化移転のメカニズムを考察することを通して明らかにすることが重要な目的となった。

### 3. 研究の方法

まず、分析の理論的枠組を決定するために、社会学等の関連文献を調査した。その結果、音楽など芸術の移転においては、芸術品に内在する芸術的質よりも、外在的な言語メディアの果たした役割が決定的に大きいと、理論的に想定するにいたった。

具体的に言えば、一般には音楽は「国境のない言語」と言われるごとく、音楽美は普遍的だと見なされがちである。しかし、音楽も文化の一領域である以上、一定のコードの集合体にほかならない。したがって、音楽の移転には、それを形成し、意味を与える文化コードが移転することが前提となる。逆に言えば、コードが共有されない環境に移植されても、音楽は根づかないのである。

文化コードの移転には、種々の要因が作用する。しかし、なかでも大きな役割を果たすのが言語である。言語による社会文化的環境が、外来の文化コードの受容に促進的な作用を及ぼすのである。

以上のような理論的考察をふまえて、音楽をめぐる言説、とくに同時代の評論や新聞・雑誌の記事を主な素材にした。具体的には、すでに成立しつつあった音楽専門ジャーナリズムの『音楽雑誌』『音楽』などの雑誌、『東京朝日新聞』『読売新聞』などの日刊紙、さらに『帝国文学』『白百合』『女学雑誌』『太陽』などの雑誌類である。

さらに、関係者の残した種々の回想を収集し分析した。この関連では、東京音楽学校の同窓会会誌である『同声会報』などが大いに有用であった。

さらに、こうした資料から、当時の洋楽の社会的側面をも明らかにした。たとえば、演奏会という、旧来の日本にはなかった音楽実践の形式がいかに明治社会のなかで行われ、かつ受容されたかである。音楽会の催行の実際の側面(会場、主催者等)、音楽会でのマナーなどを解明することが必要であった。

また忘れてはならないのは、こうした言説は明治日本の社会文化的状況のなかにはめ込まれていたことである。したがって、言説

をその社会的機能にまで立ち入って分析するには、移転の環境としての明治の社会と文化に留意することが不可欠である。

そこで、単に音楽や文化だけではなく、宗教、道德の次元にも目配りをするよう留意した。日本近代史のこれまでの研究蓄積を幅広く参照する一方、福沢諭吉、徳富蘇峰、山路愛山などの文筆家の著作を取り上げて、洋楽など西洋の文物の受容について明治日本の観念を分析した。

#### 4. 研究成果

上記の「2. 研究の目的」に記した二つの目的のうち、第一については、音楽文化の移転の歴史的事実の詳細な事実を明らかにした。明らかになった事実は多数に上るので、そのすべてをここで記すことはできない。

ごく数例を挙げるなら、Dittrich はドイツ音楽文化の移転に大きな役割を果たした一方、日本側との意思疎通を欠いた結果、彼による移転の成果がそのまま定着することがなかったことが解明された。その意味で、ドイツの音楽文化の定着はユンケル August Junker の着任以降のことと考えるべきである。

留学生については、「本場」での勉学・生活の苦労の実態が解明された。その結果、滞在先での修学の一時中断や、事実上の中途退学を余儀なくされたケースが見られた。

以上のように見ると、ドイツからの音楽文化の移転が幾多の紆余曲折を経て進行したことが明らかになった。

第二の目的の成果としては、移転のメカニズムは複数の要因によることを解明した。1つは、政府の教育政策という「上から」のイニシアティブである。これと同じく西洋化という方向性を共通にししながら、同時に文明化願望という「下から」のうねりも、洋楽を人々の間に根づかせるうえで大きな役割を果たした。

さらに、明治体制から疎外されたキリスト教徒は、洋楽に「真正の」近代化を求めて、これに専心した。時代が下って、世紀転換期には、明治体制の硬直化に反発する青年層が、その反抗の正当化をワーグナーの作品に見ようとした。

つまり、「上から」と「下から」の種々の社会文化的なエネルギーが、洋楽移転のメカニズムを支えたと言える。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 7 件)

- ① Toru Takenaka, “The Myth of “Familiar Germany”: German-Japanese Relationships in the Meiji Period Reexamined,” in Joanne Miyang Cho/Lee M. Roberts/Christian W. Spang (eds.), *Transnational Encounters between Germany and Japan: Perceptions of*

*Partnership in the Nineteenth and Twentieth Centuries*, Basingstoke: Palgrave Macmillan 2016, pp. 19-34

- ② Toru Takenaka, “Zur Reichweite des Kulturtransfer-Begriffes am Beispiel der japanisch-deutschen Beziehungen,” in Lars Klein/Martin Tamcke (eds.), *Imagining Europe: Memory, Vision and Counter-Narratives (Studies in Euroculture, vol. 2)*, Göttingen: Universitätsverlag Göttingen 2015, pp. 53-67
- ③ Toru Takenaka, “The Japanese Image of Germany Over the Past 150 Years,” in Claudia Rammelt/Cornelia Schlarb/Egbert Schlarb (eds.), *Begegnungen in Vergangenheit und Gegenwart: Beiträge dialogischer Existenz*, Münster: LIT 2015, pp. 257-66
- ④ 竹中 亨 『近代化の模範』から『生活大国』へ——近現代日本におけるドイツ像の展開『パブリック・ヒストリー』12 (2015年2月) 1~14 頁
- ⑤ Toru Takenaka, “Musik hören mit dem Kopf: Soziokultureller Mechanismus der Rezeption westlicher Musik im modernen Japan,” in Sven O. Müller/Jürgen Osterhammel/Martin Rempe (eds.), *Kommunikation im Musikleben: Harmonien und Dissonanzen im 20. Jahrhundert*, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht 2015, pp. 201-13
- ⑥ 竹中 亨 『近い国ドイツ』の神話——明治期日独関係の再考に向けて『大阪大学大学院文学研究科紀要』54 (2014年3月) 1~23 頁
- ⑦ Toru Takenaka, “The Domestication of Universal History in Meiji Japan: Fukuzawa Yukichi and Nakae Chōmin,” *Saeculum: Jahrbuch für Universalgeschichte* 63-1, 2013, pp. 119-142

[学会発表] (計 4 件)

- ① Toru Takenaka, „Bankokushi: A Worldview Between “Bunmei” and “Civilization”、ハイデルベルク大学クラスター「アジア・ヨーロッパ」Cluster of Excellence: Asia and Europe in a Global Context 国際会議『グローバル史と明治維新』Global History and the Meiji Restoration (ハイデルベルク、ハイデルベルク大学、2015年7月)
- ② Toru Takenaka, „Suzuki spielt Cello: Wie hat westliche Musik den Habitus der Japaner beeinflusst?“『東アジアと聖なる響きの力』Öffentliche Ringvorlesung, Georg-August-Universität Göttingen „Ostasien und die Macht heiliger Klänge“ (ゲッティンゲン、ゲッティンゲン大学、2015年5月)
- ③ 竹中 亨 『近い国ドイツ』の神話——明治期日独関係の再考に向けて九州史学会『九州史学会大会』(福岡市、九州大学、2013年12月)

- ④ Toru Takenaka, Rezeption universalhistorischen Denkens im modernen Japan、ドイツ東方学会 Deutscher Orientalistentag 第32回大会（ミュンスター、ミュンスター大学、2013年9月）

〔図書〕（計 1 件）

- ① 竹中 亨『明治のワーグナー・ブーム——近代日本の音楽移転』中央公論新社、2016年4月、395頁

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

竹中 亨 (TAKENANA, Toru)  
大阪大学・大学院文学研究科・教授  
研究者番号：90163427

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：